奈良県立医科大学学報

平成14年度　卒業生とともに

2003
APRIL
vol.4

CONTENTS

「高い志を持ち、凛として」・・・・・・・・表紙～2
ホオジロ通信（吉原学生部長）／
平成14年度　中島佐一学術研究奨励賞・・・・3
研究紹介　臨床　第3内科学教室・・・・・・・・4
研究紹介　基礎　第2生理学教室・・・・・・・・・5
看護短期大学部から・・・・・・・・・・・・・・6
看護部から／図書館だより・・・・・・・・・・・7
退職者メッセージ・・・・・・・・・・・・・・・8
就任挨拶／学術交流事業の実施状況について／
奈良県立医科大学後期公開講座・・・・・・・・9
平成14年度　卒業式／学位授与の状況／
オープンキャンパスの実施・・・・・・・・・・10
教授会 Report ・・・・・・・・・・・・・・・11
平成15年度 奈良県立医科大学費特別会計予算／
編集後記・・・・・・・・・・・・・・・・・12

卒業式学長式辞（平成15年3月19日）

『高い志を持ち、凛として』

学長　吉　田　　修

卒業生諸君、本日はおめでとうございます。

諸君が今日この日を迎えることができたのは、何よりも諸君の弛まぬ努力の結果でありますが、同時に今日まで諸君を温かい愛情と期待をもって支えて来られたご父兄や、諸君の人間形成に貢献された多くの方々のお陰であり、それらの方々への感謝の気持ちも忘れないで欲しいとおもいます。

今日世界情勢は危機的状況にあります。人類にとって最も不幸な、また最も愚かな戦争が中東で避けられない状況にあります。また、わが国では世界に類をみないスピードで高齢化が進んでおります。経済状況をみましても、膨大な財政赤字を抱え、経済が停滞するという状況が続いております。諸君のこれからの活躍が期待される医学・医療の世界も、時代の大きなうねりの中で、

（2頁へ続く）

はげしく動いております。危機的経済状況打開策として、最近は見境無く市場原理、自由競争論理を持ち込もうとする動きがありますが、教育においても、医学・医療においても例外ではありません。その端的な例は病院経営に株式会社参入をみとめようとする動きであります。株式会社は営利を目的とし、利潤を追求する法人でありますが、病院は営利を目的としたものでないことはいうまでもありません。これは医の哲学、すなわち「医とは何か」という本質から考えるべきであるとおもっております。

歴史上多くの医の先達は、「医は商いではなく天職である」といいました。Cecil内科学教科書の最新版にも、Goldman教授は「old-fashionに聞こえるかもしれないが医はcallingである。」と書いております。callingすなわち神からのcallであり、天職を意味します。医は天職であり、営利を目的としたものではありません。

さて、このような天職に従事する医師の「生き方」はどうあるべきでしょうか。

私事にわたりますが、私が京都大学へ入学いたしました時の総長は滝川孝辰（ゆきとき）先生でありました。1933年、鳩山一郎文相による京大法学部滝川教授の自由主義思想を理由とする免官処分と、それに抗議した同学部教授会と学生等による抵抗運動が滝川事件と呼ばれていることは、ご存じの方も多いとおもいます。滝川先生は戦後京大に復帰され、やがて総長になられました。ある年の卒業式告辞で「私は諸君に対して、他人からただの酒を御馳走になることを、自ら戒めることを希望します。今政治家の間で疑獄事件が起こっていることは、諸君もご承知のこととおもいますが、疑獄事件の原因は、すべてただの酒を御馳走になる習慣から起こっているといってよろしい。酒の好きな人が酒を飲むのはよろしい。しかし、それは、自分の銭でのむことが絶対の条件であります」といわれました。厳密にいえば長い一生の間にただ酒を一度も飲まずに過ごせる人はほとんどないでありましょう。滝川先生は、抽象的、比喩的に「ただ酒を飲むな」といわれたのだとおもいます。

医師の報酬は、本質的には、病める人々にたいする献身、time and effortsにたいする対価であります。利潤追求型の「ただ酒」的なものがあってはなりません。今日、社会の医師不信がいわれておりますが、その原因の一端は、一部の医師の倫理観の低さにあることは否定できません。高い倫理観にもとづく医師としての社会的使命を諸君は生涯にわたり自覚し、実践して欲しいとおもいます。

その帰結として、医学・医療に従事する者は、簡潔で節度のある生活を送ることになります。諸君は唯物的な豊かさを求めるのではなく、心の豊かさを目指して欲しい。病める人を救うことができたときの心の底から湧き出る喜び、あるいは医学の研究において今まで誰も見いだせなかったことを発見したときの、身が震えるような感動にこそ生き甲斐を見いだして欲しいと望むのであります。

諸君は或いは私の考えが理想的すぎるというかもしれない。医学・医療の現実はそのように美しく、清らかなものではない、そんな甘いものではないというかも知れない。私とても、現実を知らないではない。恐らく諸君以上に知っているでありましょう。しかし、それでもなお、いやそれだからこそ、諸君が志を高く持ち、緊張した倫理観をもって、これからの人生を凛として歩んで欲しいと切望するのであります。

諸君の人生に幸多かれと祈り式辞といたします。

ホオジロ通信

これからの10年

学生部長
吉　原　紘一朗

現在医学部及び医学教育は大変革期のまっただ中にあります。入学試験の改革、教育カリキュラムの再編、臨床実習資格試験の導入、臨床実習、卒業試験、国家試験及び卒後臨床研修等の改革、大学院の再編整備など、全国的な大改革が進みつつあります。本学においても多くの先生方に貴重な時間を割いて御協力戴き、着々と準備が整いつつあり、可能な部分から実施してゆきつつあります。

このような中、昨年度周産期医療センターが開設され、今年度病理診断学講座が開講される予定となっております。さらに、奈良県立医科大学教育開発センター（仮称）の設置が予定されており、今年度中には医学教育専任教員２名をお招き出来る見通しとなっております。厳しい経済状況の中、ご英断戴いた県当局並びに御盡力戴いた関係各位に対し厚く御礼申し上げます。又、大学院改革につきましても紆余曲折がありましたが、大学院制度改革検討部会のご努力により、平成16年度の発足へ向けて準備を整えつつあります。

今後、教育開発センターを中心に奈良県立医科大学の教育改革が加速されることと思いますが、より良いものを求めて大学の英知を結集し「我々」の教育体制を築きあげたいと願っております。10年後の奈良県立医科大学のあるべき姿へ向けて、学内外の皆様の御協力をお願い申し上げます。

平成14年度　中島佐一学術研究奨励賞

吉治仁志先生・田中一郎先生が受賞

今年度は８名の応募があり、その中から内科学第三講座の吉治仁志助手（写真：左から２人目）と小児科学講座の田中一郎学内講師（写真：左から４人目）が受賞され、３月11日に授与式が行われ奨励金30万円とクリスタル製楯が贈られました。

吉治助手のテーマは、「血管新生因子VEGFを分子標的とした肝癌制御の基礎的検討」で、抗癌剤に代わる新しいタイプの治療法の開発に貢献するものと期待できます。田中学内講師のテーマは、「血友病の完全治癒を目指した血友病Aイヌモデルの生体部分肝移植」で、血友病の恒久的治癒を目指した世界でも初めての研究として期待されます。

なお、今回応募された先生方は、それぞれの分野で実績のある方ばかりで、学内の賞とはいえ、非常に重みが感じられます。今後ますますのご活躍を期待しております。

受賞者（学長、担当教授とともに）

研究紹介

臨床 第3内科学教室

内科学第３講座
教授　福　井　　博

第三内科学教室は昭和52年に本学第一内科の消化器系、臨床代謝系研究室に所属していたメンバー十数名で出発したが、初代辻井正教授の指導下に多くの人材が集まり、専門領域も大きく拡大した。現在は教授福井博、助教授岡本新悟、講師植村正人、山尾純一、竹川隆、助手藤本正男、小嶌秀之、吉治仁志、山崎正晴、豊原眞久、今津博雄、ほか医員８名の陣容で、関連病院との密接な連携のもとに消化器（消化管・肝胆膵）疾患、内分泌・代謝性疾患、心身医学の診療を担当している。年間56,000人を超す外来患者を診療し、消化器内視鏡・超音波検査をはじめ多種多様な検査・治療に没頭する日常の合間に研究を進めている。テーマは自ずと臨床に直結したものとなり、患者に還元できる研究を何より重視している。すなわち、病態生理の解明を基礎に新しい治療法をめざして、遺伝子、免疫から代謝、発育異常、心の病に至るまで多岐にわたる研究を展開している。

１）肝硬変の病態と治療

腹水の病態生理について循環動態、肝機能、腎機能、内分泌機能などから解析し、難治性腹水、肝腎症候群に関連して腹腔内の局所因子の関与にも注目している。また実験的にはアドレノメデユリン、エンドセリンの全身循環動態、門脈圧亢進症に及ぼす影響を検討し、アルブミン合成の制御機構に関する基礎的検討も開始している。さらに、総合医療病態検査学教室松村雅彦講師とともに門脈血行動態を基礎にした食道・胃静脈瘤の理想的な内視鏡的治療の確立に努めている。

２）エンドトキシン(Et)と肝障害

厳密な血中Et測定成績をもとに、各種肝疾患におけるEt. サイトカインと全身病態との関連を検討している。最近ではEt処理にかかわる結合蛋白やマクロファージ機能異常の観点から病態解析を試みている。

３）慢性肝疾患の診断と治療

定期的な肝生検検討会に集積された厖大な資料をもとに、臨床像、血液検査所見から肝組織像をどこまで類推できるか、1000例を超えるインターフェロン治療成績からどこまで慢性肝炎の予後を予測できるかについて、多変量解析を用いた検討を加えている。

４）肝癌の発生病理と遺伝子治療

生体内の遺伝子発現を自由に制御できるRetro-Tet-systemを用いて肝細胞癌の発育・進展におけるVEGF、血管新生の意義を解明し、血管新生抑制に基づく新しい治療法の開発をめざしている。また、香川医科大学に転出した栗山茂樹教授とともに臨床応用可能な肝癌の遺伝子治療を目標に基礎的研究を続けている。

５）肝線維化の病態解析

細胞外マトリックス分解酵素を阻害するTIMP-1に注目して、TIMP-1トランスジェニックマウスを作製し、肝線維化病態との関連を検討している。

６）胆汁うっ滞性疾患における肝内輸送蛋白

原発性胆汁性肝硬変、薬物性肝障害、自己免疫性肝炎などにおいて肝内輸送蛋白の発現を検討し、取込み輸送蛋白、胆管側膜排出輸送蛋白の変化の病態生理学的意義を検討している。

７）胃・十二指腸粘膜病変の病態解析

非ステロイド性抗炎症剤およびHelicobacter pylori(Hp)感染の胃・十二指腸粘膜におよぼす影響について基礎的検討を続けており、最近ではとくにHp感染に伴うモノクロラミンの胃粘膜傷害機序に注目している。

８）発育異常の診断と治療

発育異常の早期診断のためのＷＨＡＭＥＳ法を開発して、小学校・養護学校教員を啓蒙し、Turner症候群、Kallmann症候群をはじめ多くの患児の治療に成果をあげている。最近では発育異常の遺伝子診断も手掛けている。

９）食行動異常症の病態と治療

学内外から心身医学的問題を抱える多くの患者を紹介されており、その診療経験をもとに、食行動異常症などを中心に解析している。

この他、今後発展させたい分野として、肝再生医学、大腸癌の遺伝子学的解析、非アルコール性脂肪肝炎の病態解析などがある。さらに血液凝固異常と肝病態、消化管運動障害、アルコール性肝障害、急性肝不全、肝と胆汁酸、内臓脂肪蓄積症など、これまでの研究成果の上に新しい手法による発展を期待している分野もある。前途有為の若い研究者を多く迎え入れ、学内外の多くの機関との共同研究の輪をさらに広げ、頑張りたい。

研究紹介
基礎 第2生理学教室

生理学第２講座
教授　高　木　　都

私どもの研究室では循環器・消化器を対象とする様々な研究を行っております。

基礎医学的研究から臨床医学に直結する研究まで幅広い研究に取り組んでおります。今回は、その中から循環器の研究について紹介したいと思います。そのために、私は昨年10月17日から22日迄と、12月９日から今年の１月９日迄の二度にわたって渡米し、共同研究を行ってきました。

共同研究のパートナーは、ハーバード大学医学部循環器科のDr. Roger Hajjar です。彼は最近37歳という若さで準教授に昇格しました。循環器分野でのトップジャーナルであるCirculation に数多くの論文を発表し、また多くの投稿論文の査読も行っている新進気鋭の臨床医であり研究者でもあります。

Dr. Roger Hajjarとは2001年国立循環器病センターで行われたCOE (center of excellence) による国際シンポジウムで知り合い、奈良医大でセミナーをしてもらいその場で共同研究の合意を得ました。具体的には、まず学位を取得したばかりの第三外科の若い先生が2001年９月から留学し共同研究の準備にかかりました。

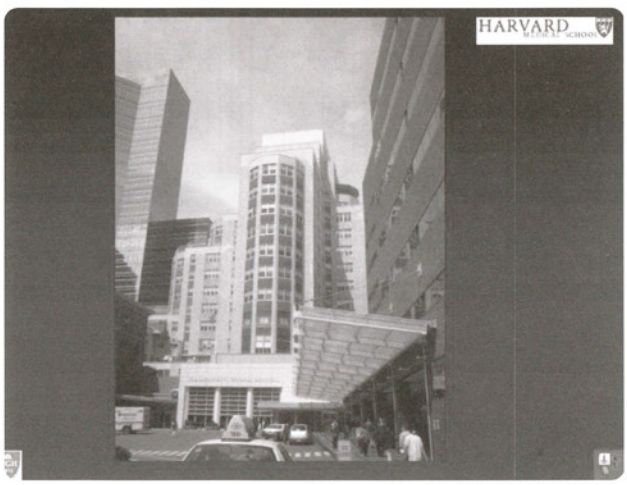
まず、10月17日から22日迄の渡米でそれまで準備されていた実験系を完全に動くようにしてきました。そして、12月からは私は１ヶ月間滞在し、その間に第三外科と第二生理の若い先生に一人ずつ順番に次々と３人渡米してもらい、全員で協力して実験を行いました。

In vivoでの遺伝子導入という新しい技術の取得とまたその方法の改善を図りながらの実験でした。In vivoでの遺伝子導入後のラットの血液交叉灌流摘出心臓を用いて、左心室の力学的・エネルギー学的研究を行いました。これまでの研究で、様々な不全心モデルの機械的仕事とエネルギー消費を解析することによって、それらと細胞内カルシウムハンドリングとの関係を明らかにしてきました。そして細胞内カルシウムハンドリング障害が様々な不全心の形成に関与していることを明らかにしてきました。

この研究をさらに世界に向けて情報発信をしていくために、アメリカ、ボストンのハーバード大学医学部に新たな実験系を立ち上げたのです。場所はMGH（マサチューセッツ総合病院）内です。あくまでも、予備実験という形ではありましたが、次のような結果を得ることができました。

心筋細胞内のカルシウム貯蔵部位への取込みを行うカルシウムポンプ（SERCA2A）を制御している蛋白であるフォスフォランバンのアンチセンスをアデノウイルスベクターで、in vivo遺伝子導入を行いました。方法は鎖骨下動脈から上行大動脈の付け根の大動脈弁付近まで挿入したカテーテルを使ってアンチセンスを注入するものです。遺伝子導入をして数日間おいて、その効果が出始めてから、実験動物として使用します。カルシウム過負荷によっておこる不全心モデルにたいして、アンチセンスフォスフォランバン遺伝子の導入によって、不全心になるのが防止されるか、一過性に不全心になっても回復するという結果が得られました。

もちろん、これらの結果は、初歩的なものですが、今後さらに第二生理とハーバード大学医学部循環器科のDr. Roger Hajjarとの共同研究を継続発展させていくことによって、この奈良医大でも遺伝子治療をルーチンにしていくために基礎医学の立場から少しでも貢献できればと思っています。また、そのための動物実験による基礎研究が大いにできる環境づくりが是非とも必要と考えております。学内の基礎・臨床各科の教室の御協力を心からお願いするものです。



▲ マサチューセッツ総合病院正面玄関

看護短期大学部から

基礎看護学の紹介

伊　藤　明　子（基礎看護学教授）

学生がはじめて看護の扉を開くのは「基礎看護学」で、看護とは何かを、これまで体験したことや身近な生活を題材として、看護職者となるための基礎について学びます。その「基礎看護学」が学問領域の一つとして認められたのは、平成元年の保健師助産師看護師法の指定規則一部改正からです。その後、平成９年の改正では、人間の成長・発達段階の区分による領域別看護学から、生活する人間の「場」と「状況」に合わせたカリキュラム開発へと新たな方向性が示されました。

一方、21世紀の医療・看護は「癒しの世紀」といわれるなど、病気をみるより病人をみることが重視され、病人の側に立った看護実践が強く叫ばれています。病む人間にアプローチするには、専門的な知識だけではなく、「人はまず人である」という、看護学における人間的な関わりについて深く追究することが求められます。

基礎看護学では、こうした動向や本学の教育理念を踏まえ、各科目の構造化を図り、すべての科目と関連させながら授業を展開しています。特に演習・実習科目では、学生と教員の相互作用によって教える側にも教える意欲が、教えられる側にも教えられる意欲が湧くような学生・教員関係を生み出せるように、学生のグループ編成を少人数にするとともに、一人の教員が同じ学生を継続して担当しています。そのことによって、教員は学生の僅かな変化に気づき、学生はその時その場で感じていることをありのままに表現し、自らを開くことにつながる指導ができると考えています。学生が自らを知り、それをありのままに受け入れ、そこから成長への手がかりをキャッチできるように、共に学び合う仲間や場づくりに努めています。
基礎看護学を指導する上で、各教員が常に大切にしていることを紹介します。

対　話 青山美智代	共に育つ 三毛美恵子	同じ目線で 須藤　聖子	その人らしく 林　有学	トライ＆エラー 大久保千里

また、教育を進めるうえで大きな支えとなっていることは、担当教員の和と開学当初から取り組んできた共同研究による成果です。特に学生が患者を理解するプロセスにかかわる問題を様々な切り口で研究し、学生の実習場面における「患者－学生関係」「学生－指導者関係」「学習支援」等に焦点をあてた研究を行い、経験から学びとる能力の育成や患者の問題を解決する能力の育成につながる教育方法や教授技法について創意工夫を図っています。

基礎看護学教員

各教員は、教育を受ける対象者が全くの初学者であることから、学生に看護学の面白さを伝え、専門職者としての責任や自覚を持ち、一人の人間として成長していくための芽を育てることを大切にしています。　（看護短期大学部）

看護部から

平成15年度看護部の目標

平成15年１月９日看護部教育委員会主催による「年頭の挨拶」で、森本智磨子看護部長の講話があり、その内容は次のとおりでした。

「平成14年３月１日から看護婦の名称が看護師に変わったが、『師』にふさわしいより質の高いケアを心がけていくことが必要である。そのためには、まず基本的なことをしっかり身に付け実践すること。看護援助を行う時、常に患者中心に考えること。一つ一つの関わりを大切にして、積み重ねていくことにより、患者との信頼関係が確立し、そのことがよりよい看護につながっていく。また看護ケアに責任を持ち、なぜこのケアが必要なのか根拠を明確にし、自分の意見や考えを相手に伝えることができるようにする。」

看護部では、次の理念のもとに、年間の看護部目標を立て看護実践を行っています。
以上のことを鑑み、今年度の看護部の目標を次のように決定しました。

看護部の理念

1．社会の変動、医療の進歩に伴い常に向上心をもって、患者様の立場に立ち、その人の人権を尊重し、安全で心細やかな看護を提供する。
2．地域の医療施設の中核としての役割を果たす。

平成15年度看護部目標

1．患者様が安全・安楽・安心して療養できるよう、看護の基本に立ち返り、患者様への一つ一つの関わりを大切にする。

> ・安全とは、安らかで危険がないこと
> ・安楽とは、心身に憂患（心配し心を痛めること）苦痛がなく楽々としていること
> ・安心とは、心配・不安がなく心が安らかなこと
>
> ―広辞苑より―

2．看護部の理念が遂行できるよう、看護師ひとりひとりが組織の一員としての自覚をもち、役割を果たす。

平成15年度がスタートしました。４月１日新人看護師を迎え、基本に立ち返る良い機会です。今一度、「個々の患者にとっての安全・安楽・安心とは」について考え、心新たに看護部の目標達成に向けて取り組んでいきたいと考えています。

（附属病院看護部）

図書館だより

入退館管理システムの導入について

かねてより中嶋館長が提唱していた附属図書館将来計画の一環としての開館時間の拡大が４月より入退館管理システムを導入することにより実現いたしました。これにより、年間を通じて平日、土曜日の午後10時まで、図書館を利用することができるようになります。

入退館管理システムとは、図書館玄関ドアの開閉をコンピュータで管理することにより、正規の利用資格をもっている者のみが図書館を利用できるようにしたシステムです。

入退館管理システムが作動している時間帯に図書館を利用するには入退館カードが必要になります。入退館カードはお申し出があれば発行いたします。

入退館管理システムにより、図書館を利用できる時間帯は以下の通りです。

平　日：午後6時～午後10時
土曜日：午前9時～午後10時

（入退館カードを図書館玄関ドアにあるカードリーダに通すことにより、LANで結ばれた入退館管理システムのサーバがカードの情報を読み込み、正規認定利用者であれば、ドアを開きます。）

（附属図書館）

退職者メッセージ

定年退官にあたって

病理学第１講座　名誉教授　**市　島　國　雄**

最終講義にて

本年３月31日をもって退官することになりました。平成５年７月の就任以来９年９カ月の在任ということになり、教授としては比較的短い期間でしたが皆様方のご指導、ご協力によりなんとか無事勤めることができました。比較的短い期間ではありましたが、学生の教育は勿論、学生部長、学長事務取扱と思いもかけない多くの貴重な経験をさせていただき、私の人生のうちでは最も充実した期間でした。

新年度から病理学第一講座は臨床講座の一員として病理診断学講座となり、講座の使命、目標もより明確になりました。今後も皆様のご指導、ご鞭撻によりますます発展することを心から願っております。

ご挨拶

看護短期大学部　教授　**柳　　進**

講義風景（1年生とともに）

学生時代から好きだった奈良の大学に、思いも掛けず奉職することになり二十余年間、今年で定年を迎えます。古事記や万葉集に出てくる地名に、街角で何げなく出会い、地方に住んでいては美術書でしか見られない国宝や重文が、どこででも拝観できる。こういう土地で過ごせた幸せを感謝しております。

終わりにあたり、なにか書くように云われましたが、なにも思いつきません。そこで高校の漢文の授業で教わった「學而不思即罔、思而不學即殆」（学びて思わざれば即ち罔（くら）し。思ひて学ばざれば即ち殆（あや）ふし。）という論語の一節を贈ります。

高度の専門教育時代にもっとも大切な言葉であると思います。

退職にあたって

事務局次長　**上　田　恒　夫**

本年３月31日付をもって41年間に亘る職務を終え、退職することになりました。

この間、本学では昭和42年からと平成12年からの二度の勤務となりましたが、共に変動と飛躍の時期であり、私にとって生涯忘れることのできない充実したものでありました。

その間、私に賜りました多くの皆様方のご支援ご協力に、心から感謝申し上げます。

今後とも、本学が国の内外から高く評価され、益々発展されますよう祈念申し上げ挨拶といたします。本当にありがとうございました。

就任挨拶

周産期医療センター

新生児集中治療部門　教授　**高　橋　幸　博**

平成15年１月１日をもって、本学附属病院周産期医療センター新生児集中治療部門教授に就任致しました。皆様方にはご支援を賜りましたことに厚く御礼申し上げます。

わたくしは、昭和51年に本学を卒業後、小児科を経て、平成元年から本学附属病院新生児病室、新生児集中治療部と新生児医療に取り組んで参りました。この間、本学の多くの先生方から、いろいろとご指導をいただき、新生児医療の充実をはかることが出来ました。

また、県内の療育施設や県教育研究所障害児部の先生方にもご指導を賜り、ようやく退院後のフォローアップ体制も整って参りました。今後、さらに県医務課との連携のもと、小児科、産婦人科の先生方とともに奈良県の周産期医療の発展に努力いたします。また、これからの新生児医療を支えていただける医師の養成や新生児に関連する病因病態の解明、治療法の開発にも研鑽して参ります。

今後とも、皆様方のご指導、ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

平成15年4月1日付

人事異動

・附属がんセンター所長事務取扱	学長	吉田　修
・附属病院病院病理部長兼務	教授	岡本康幸
・附属病院超音波診断室長兼務	教授	中島祥介
・附属病院周産期医療センター長兼務	教授	高橋幸博
・看護短期大学部学科長兼務	教授	今井充子
・事務局次長　奥本烝司		
・病院第一課長　井上　博		

学術交流事業の実施状況について

平成15年３月２日から９日までの８日間タイ王国チェンマイ大学医学部より４名の学生が来学し、主に彼らが希望した第１外科学、産婦人科学、小児科学において研修を行いました。関係教室の先生方本当にありがとうございました。また本学学生とも実り多い交流がなされました。

お別れパーティーのもよう

奈良県立医科大学後期公開講座

『くらしと医学』

２月22日に奈良文化会館で後期公開講座を開催しました。腫瘍放射線医学：大石元教授の「がんは怖くない」（座長：大西武雄生物学教授）、哲学：豊田剛教授の「安楽死と尊厳死」（座長：伊藤善將物理学教授）、病理学第一講座：市島國雄教授の「病院病理の話」（座長：國安弘基腫瘍病理学教授）以上の講演が行われました。興味深い演題でもあり参加者はいつもより多く、みんな真剣な眼差しで講演に聞き入っておられました。また、県民からのユニークな質問に、さすがの教授も苦笑いするなど会場を和ませる一面もありました。

大石教授

豊田教授

市島教授

平成14年度

卒　業　式

医学部卒業式

平成15年３月19日医学部卒業式が、本学大講堂にて取り行われ、92名が卒業しました。

卒業生代表 大石　豊 総代による６年間の学生生活を振り返る感慨深い答辞が印象的でした。

卒業生答辞

看護短大卒業式（平成15年3月7日）

看護短期大学部では看護学科72名、専攻科助産学専攻15名が卒業しました。
吉田学長より看護職者としての心構えとして「思いやり、微笑み、チームワーク」の大切さについての式辞がありました。

卒業証書授与

学位授与の状況

平成14年度次の38名に学位が授与されました

本審査日　14年５月21日　　１名
［乙］　廣中（板谷）安佐子（生化学）

本審査日　14年７月23日　　10名
［甲］　西　憲幸（外科学第二）
［乙］　太田　克矢（生化学）、帆風　英里（内科学第二）、上野　正闘（外科学第一）
高山　智燮（外科学第一）、阿部　穀寿（外科学第三）、中村　敏夫巳（整形外科学）
高川　健（小児科学）、桑原　理充（皮膚科学）、草野　雅章（口腔外科学）

本審査日　14年10月22日　　３名
［乙］　山内　昌哉（外科学第一）、朴　永東（小児科学）
岡本　真澄（口腔外科学）

本審査日　15年１月28日　　12名
［甲］　成川（原田）寛子（細菌学）、下嶋　典子（法医学）、松井　英人（小児科学）
勝見　祥子（皮膚科学）、井本　恭子（皮膚科学）、平尾　周也（外科学第一）、
西村　忠己（耳鼻咽喉科学）
［乙］　多林　伸起（外科学第三）、岩本　久彦（内科学第一）、佐々木　理恵（内科学第一）、
井田　裕己（外科学第二）、金本　幸秀（外科学第二）

本審査日　15年３月20日　　12名
［甲］　金　雄一（病理学第一）、西村　文彦（寄生虫学）、村田　奈保（腫瘍病理学）
福原　慎也（内科学第一）、秋田　進久（外科学第二）、枡田　充彦（産婦人科学）
［乙］　松嶋　紀子（衛生学）、金　達也（外科学第一）、佐道　俊幸（産婦人科学）
上田　卓（小児科学）、福井　義尚（泌尿器科学）、山本　広光（救急医学）

甲：博士課程を修了した者
乙：博士課程を修了した者と同程度以上の学力があると確認された者

（学生課）

情報求む！

オープンキャンパスの実施

今年から新たにオープンキャンパスを実施します。時期は、夏休み期間中の７月下旬を予定しています。

オープンキャンパスとは、大学がより優秀な学生を集めることを目的として、夏休み期間等を利用してキャンパスを開放し、受験生及び保護者等に本学のカリキュラムや施設を知ってもらうものです。大学にとっては、受験生に直接アピールし、志望者を獲得する絶好の機会ですので、この機会に本学がアピールできるもの（人・設備・イベント・その他何でも）をご存じの方は情報提供をお願いします。学生課教務係（内線2390）までご連絡下さい。　（学生課）

Report

○ 看護学科入学試験委員会の設置

〔2月12日付教授会承認〕

平成16年4月開学を目指し準備を進めている医学部看護学科について、平成15年度中に第１回目の入学試験を実施する必要がある。

このため、平成15年度は暫定的に、医学部に医学科の入学試験委員会とは別組織である、学生部長を委員長とする看護学科入学試験委員会を設置することにした。

また、平成16年4月から就任予定の看護学科の教授候補者には試験の実施面で委員会に協力願うことにした。

なお、次年度以降は、組織等を含め現在の「入学試験委員会規程」を見直したうえで入学試験を実施する。

○ 大学規程の改正状況

〔3月7日付教授会承認〕

兼業審査委員会規程の制定

兼業の取り扱いについては、平成13年１月に「教員の兼業の取扱いについて」の改正を行い、兼業申請の内容を審査する機関として「兼業審査委員会」が設置された。

その後、約2年が経過し、兼業申請に対する各教員の理解も浸透し、一定のルール化が図られてきたことを契機に、委員の任期や委員会の組織・成立要件等を明確にするため「兼業審査委員会規程」を制定した。

〔3月20日付教授会承認〕

感染性廃棄物管理規程の制定

本学の教育、研究、医療行為等に伴い発生する感染性廃棄物については、従来から廃棄物処理法等に基づき適正に処理を行ってきたが、近畿厚生局及び県医務課の指導に基づき、処理の適正化の徹底を図るため、現行処理の基本事項を「感染性廃棄物管理規程」として明文化した。

試験規程の一部改正

試験において不正行為を行った者の処分の規定を追加した。

大学学則及び大学院学則の一部改正

病理学第一講座と病理学第二講座を再編し、病理診断学講座を臨床部門に、病理病態学講座を基礎部門に置くことに伴い、両学則の講座名及び学科目名において所要の改正を行った。

なお、本件は県規則の改正となるため、設置者（県知事）の決裁を得て施行される。

○ 各種委員会委員の選任及び改選状況

〔2月12日付教授会報告〕

点検・評価委員会委員の改選（任期2年）

（学長、附属病院長、学生部長、一般教育部長、事務局長以外の委員）

大西　武雄（生物学教授）　羽竹　勝彦（法医学講座教授）
國安　弘基（腫瘍病理学教授）　上野　聡（神経内科学講座教授）
宮川　幸子（皮膚科学講座教授）

〔3月7日付教授会報告〕

国際交流委員会委員の改選（任期2年）（学長、学生部長、事務局長以外の委員）

本田陽太郎（ドイツ語教授）　東野　義之（解剖学第一講座教授）
高木　都（生理学第二講座教授）　上野　聡（神経内科学講座教授）
谷口　繁樹（外科学第三講座教授）　高倉　義典（整形外科学講座教授）
宮川　幸子（皮膚科学講座教授）　中村　忍（総合医療・病態検査学講座教授）

〔3月20日付教授会報告〕

学生部委員会委員及び同専門部会委員の改選（任期2年）

（学生部委員会）

大﨑　茂芳（化学教授）　石坂　重昭（寄生虫学講座教授）
岸本　年史（精神医学講座教授）

（カリキュラム部会）

澤浦　博（英語教授）　羽竹　勝彦（法医学講座教授）
中島　祥介（外科学第一講座教授）

（学生生活部会）

岸本　年史（精神医学講座教授）　大﨑　茂芳（化学教授）
石坂　重昭（寄生虫学講座教授）　澤浦　博（英語教授）
三笠　桂一（内科学第二講座助教授）　石指　宏通（保健体育講師）
石谷　昭子（法医学講座講師）

入学試験委員会委員の改選（任期１年）（学生部長、一般教育部長以外の委員）

大﨑　茂芳（化学教授）　車谷　典男（衛生学講座教授）
岡本　康幸（中央臨床検査部教授）

看護学科入学試験委員会委員の選任（任期１年）（学生部長以外の委員）

大西　武雄（生物学教授）　小西　登（病理学第二講座教授）
森川　肇（産婦人科学講座教授）　原　嘉昭（眼科学講座教授）

○ 教授の退職及び転出

平成15年3月31日で病理学第一講座の市島國雄教授は停年退職され、4月１日付で腫瘍放射線医学の大石 元 教授（附属がんセンター所長）は県の要請により、県立奈良病院長として転出された。

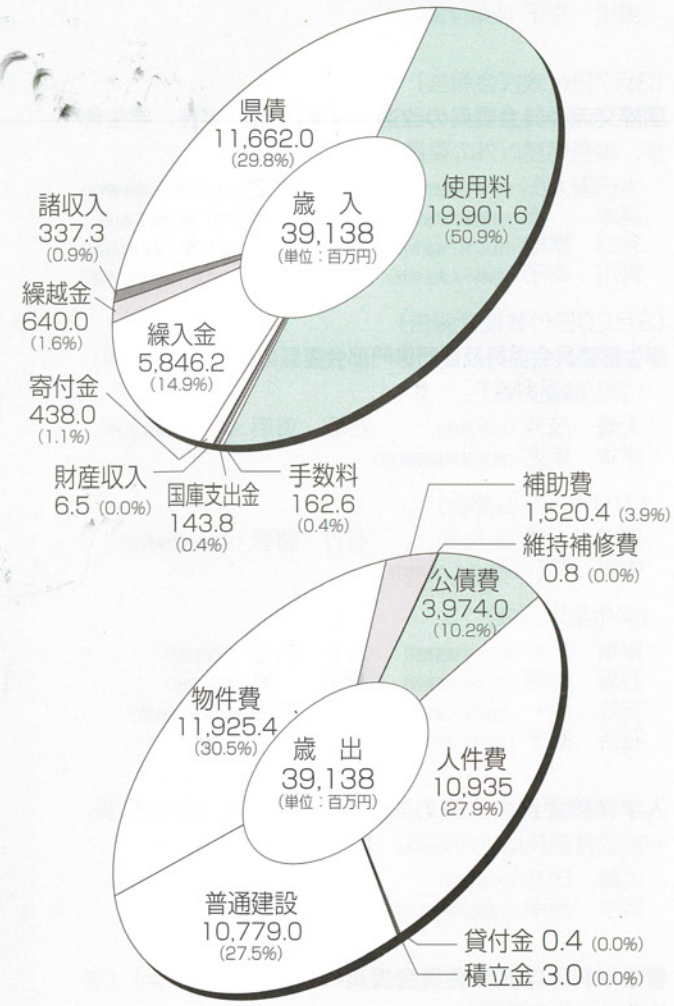
両教授には、本学名誉教授の称号が授与された。

（総務課）

平成15年度　奈良県立医科大学費特別会計予算

景気の回復基調は未だ見えず、県当局においても徹底した行財政改革の一環として、今年度から初めて一般職員の給与抑制措置に取り組まれることとなるなど、厳しい財政状況が痛感される現況にあって、平成15年度奈良県立医科大学費特別会計予算については、総額391億38百万円と前年比20.0%増で平成15年3月18日の2月定例奈良県議会最終日に成立いたしました。

今後、独立行政法人化への対応や診療報酬制度の包括化など、大学及び病院を取り巻く環境は一層厳しくなることが見込まれますが、経営改善計画の推進を始め、大学・病院がそれぞれの基盤強化を進めながら、教育・研究・診療の各分野にわたり本学の発展を図っていく必要があります。



◎ 平成15年度予算における主な事業は次のとおりです。

(単位：百万円)

看護学科設置準備事業	59.0
第2本館等整備事業	5,474.3
C病棟備品整備事業	4,899.0
病院玄関前整備事業	102.4
(仮称)精神医療総合センター整備事業	90.0
(仮称)卒後臨床研修センター整備事業	20.0
大学院教育充実	10.5
(仮称)医学教育開発・研究センター運営事業	6.1
電子カルテ導入検討事業	16.0

(参　考)

病院使用料：いわゆる診療報酬で平成14年度予算に対し、1.7%増収を見込んでいる。

手　数　料：主なものは、大学の入学料、附属病院の診断書等の証明手数料

繰　入　金：一般会計から財源補填のために支出されるもの

雑　　入：主なものは、研究生、専修生の受講料

県　　債：第二本館（C病棟）の建設工事費に係る借金等

公　債　費：過去に借り入れた県債の元利償還金

積　立　金：大学整備基金の運用収入（利息）を同じ基金に積み立てるもの

普通建設：第二本館（C病棟）等の建設事業費

物　件　費：人件費、維持補修費、補助費等以外の経費の総称で、委託料等がある

補　助　費：主なものは、奨励会交付金、各種協会等の負担金、臨床研修医等への謝金等

編集後記

新年度のスタートです。秋にはC病棟の竣工が予定されており、それに伴う各所の移転等、本学の"動き"が本格化してゆく年度です。本学全体の今後の"動き"がvividに伝わりますよう編集スタッフも努力してゆきたいと思っております。前号の記事のうち科研費採択の記載事項のなかで、外科学第一講座の久永先生は昨年7月に講師から助教授に昇任されております。ここに訂正しますとともにお詫びいたします。

編集委員

○山下　勝幸（生理学第一）　上田　惠子（母性看護学）
吉田　泰彦（英　　語）　南口　昌克（病院第一課）
水野　文子（細　菌　学）　柳澤　美穂（学　生　課）
吉田　克法（透　析　部）　大門　喜信（総　務　課）
植林みどり（看　護　部）　田中　章介（総　務　課）

（○印は委員長）